

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：16102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23560726

研究課題名(和文) 日本の近代住宅が韓国の伝統住宅の変容に及ぼした影響

研究課題名(英文) The Influence of the Modern House of Japan on the Change of the Korean Traditional House

研究代表者

金 貞均 (KIM, Jeong-Gyun)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：10301318

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円、(間接経費) 840,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は韓国の近代住宅発展の系譜を日本住宅の影響の側面から究明しようとするもので、近代期及び近代期以降の日韓住宅調査(現地調査・ハウスメーカー調査)によって行われた。調査研究の分析・考察の結果、韓国の近代期は日韓併合の1910年から1945年までと定め、日本の近代住宅を「中廊下型住宅」を中心に再考した。韓国南部地方の伝統住宅の特徴を明らかにしたうえで、近代期南部地方の新興韓屋における日本住宅の影響について、「平面形式」「マダン構成」「マルの室内化」「近代的建築材」「日本式空間導入」の観点から考察した。近代期以降は西洋の影響を受け、日韓ともに「居間中心型」間取りという共通性を持っている。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to clarify the genealogy of the development of the modern house of Korea from the aspect of the influence of the Japanese house. This research was carried out by the field survey and house maker survey in Japan and Korea. Results indicated the followings.

The modern age period of Korea determines from 1910 to 1945. We reconsidered the modern house of Japan centering on "middle corridor type house". We clarified the characteristic of the traditional house in the south district of Korea. We studied the influence of the modern house of Japan on the change of a newly hanok in the south district from the viewpoint of "plan form" "madang constitution" "change to indoor of maru" "modern architecture material" "introduction of the Japanese style space".

After the modern age period, Japan and Korea have the common feature called "living room centered type" in the plan of house. And Japan and Korea are succeeding the tradition of each wooden house and ondol.

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築学 都市計画・建築計画

キーワード：韓国の伝統住宅 日本の近代住宅 新興韓屋 伝統性の継承 居住の文化性 異文化理解

1. 研究開始当初の背景

韓国の近代化は、開港(1876年)以降1945年までの日本植民地期に行われた。建築・住宅分野においては洋式・日式住宅、住宅改良運動など外来の住居様式・文化が日本から流入し、日本が表層的住居文化を先導したといえる。韓国で近代住宅に対する議論は1970年代後半以降活発に行われ、多くの研究成果を上げてきた。その多くは近代化を洋式建築の移入と定着の過程と捉えた、都市住宅を中心としたものであり、相対的に変化の進行が遅い農村地域の住宅は疎かにされてきた。近年では住宅の近代化を伝統建築の持続的変化過程の中で究明しようとする視点、在来住居文化の内在的近代化過程として捉えようとする視点が提案され、近代期の地方韓屋を対象とする研究が重視されてきている。一方、韓国の近代住宅をめぐる日本側の研究は近代化による変容の視点から日韓の住居・住様式の比較考察を試みた研究、住宅平面の考察と空間の変化に注目した朝鮮営団住宅研究や日式住宅に関する研究などがある。しかし、韓国の近代住宅の研究において、地方韓屋の発展過程は不明で、実態解明が待たれている。

一方、日本植民地期に全国地方都市まで拡散した日式住宅をはじめ日本の影響に関しては都市住宅を中心に部分的に論じている程度に止まっており、近代住宅の発展過程における日本の影響を真正面から取り上げた研究はない。

なお、調査対象地域として南部地方(全羅南道、慶尚南道)を選定した理由は、開放的土地柄のうえ非保守的性向の新興富豪(富農)が相対的に多かったからである。つまり、近代期の社会や生活の変化を積極的に受容できる土壌を持っており、当時の新興富豪は規模の大きい住宅(近代韓屋)を建てた。因みに近代期南部地方は多数の鉄道網と日本との直航路(麗水-下関、木浦-下関、釜山-下関等)によって目覚ましい発展を遂げてお

り、日本人の居住者も多かった。特に全羅南道の住宅は民家(庶民住宅)中心で、韓屋(班家、中上流層住宅)の伝統性が相対的に弱い。こうした地域柄で、伝統性と外来性(日本からの影響)をどう融合させ、新しい住居文化を作り出したのか、近代期の地方韓屋の発展過程に着目した。

2. 研究の目的

本研究は韓国の近代住宅発展の系譜を日本住宅の影響の側面から究明しようとするものである。本研究では日韓の関連研究の成果を踏まえて、日本の近代住宅が韓国の近代期住宅の発展に及ぼした影響を明らかにし、異文化間の衝突と融合・受容を通してみられる日韓住居の本質と民族・地域差による違いをより深く認識し、現代住宅の検証につながる知見を得ることを目的とする。

近代期とその後の日韓の住宅の変化発展における類似点・相違点などの特色から、韓国の近代住宅における日本住宅の影響について再解釈を行うとともに日韓の住居発展の方向性を考察する。

3. 研究の方法

本研究は日本の近代住宅が韓国の伝統住宅の変容に及ぼした影響を明らかにするために、文献研究による論理の裏付けと現地調査・実測調査による仮説の立証というかたちで進める。研究ではまず近代期日本住宅の伝統性の変容に焦点を合わせ、以降の日韓調査研究の基盤となる近代化要因を確認する。

調査対象である韓国南部地方の韓屋調査は、3回に分けて行われた。調査日程と地域は、①平成24年6月14日~20日、光州・羅州・長興・宝成(全南地域)、②平成24年11月7日~14日、密陽・昌寧・居昌・山清(慶南地域)、③平成25年11月14日~11月20日、山清・咸陽地域において現地韓屋調査等を実施した。近代期に建築された韓屋総17棟に関する基本資料の収集および現地調査

(平面、木架構造や部材の確認、外観・建築材の確認、マダン(庭)の構成方式等)を行い、近代期南部地方における新興韓屋の発展の様子を明らかにした(下記リスト)。日本の近代住宅は「江戸東京たてもの園(小金井市)」に移築・保存・展示されている明治・大正・昭和初期建築の住宅群を中心に確認した。なお、近代期以降の住宅として日本の一戸建て住宅、韓国のアパートを取り上げ、伝統性と近代化要因の継承と変容に焦点を合わせ分析・比較する。調査方法として、日本においては大手住宅メーカー7社から間取り図を取り寄せ(521平面)、韓国においては大手住宅メーカー建築の現地間取り調査を実施した(3か所、モデルハウス等)。

*参考：調査対象韓屋リスト

<全南地域>①光州 崔家家屋 1920年/金家家屋?年 ②羅州 朴家家屋 1910年(主屋棟) or 1934年/洪家家屋 1929年(主屋棟) ③長興 魏家家屋 1918年/魏家家屋 1937年 ④寶成 林家家屋 1920年/李家家屋 1900年前後

<慶南地域>①咸陽 許家家屋 1918年 ②山清 崔家家屋 1919年/権氏古家 1900年代/朴氏古家 1919年/権家家屋 1917年 ③居昌 申家家屋 1927年 or 1926年/申家家屋 1940年(主屋棟) or 1920年代 ④蜜陽 孫家家屋 1915年 ⑤昌寧 成氏古家 1929年

4. 研究結果

(1) 研究概念・用語等の明確化

「近代期」(日本植民地時代)と「近代」(モダン)、「近代期の住宅」(近代韓屋：近代期に立てられた地方の韓屋)と「近代住宅」(1960年以降の住宅)を捉える視覚差を確認した。本研究における韓国の近代期の設定は(開港以降と見るのが一般的であるが)日韓併合の1910年から1945年までとする。その理由は1910年を境に日本からの移住者が増え、日本人のための日式住宅が朝鮮各地に建

築され、一般人の目に触れる機会が増えはじめたからである。よって在来住宅への影響は1910年以降と見るのが妥当である。

(2) 日本の近代住宅の再考

日本の近代期は明治・大正・昭和初期と捉えられる。日本の住宅は明治時代以降、西洋の住宅や生活様式が持ち込まれることによって、様々な変化を遂げてきた。日本における住宅の近代化は明治・大正時代の西洋化・洋風化とともに始まり(第1段階)、戦後のLDK型住宅の成立とともに完成された(第2段階)といえる。本研究で注目するのは第1段階における日本の伝統住宅の変容で、特に「中廊下型住宅」である。「中廊下」の導入をめぐるのは、洋風化の視点と内在的発展の視点がある中、本研究では伝統性と西洋性を融合させ、変容・定着していく過程として捉える。日本に西洋住宅の導入が始まったのは、明治時代外国人居留地に西洋館が建築されてからであり、それ以降西洋住宅に新しい模範を求め、取り入れる努力をしてきた。座敷や次の間がからなる続き間の格式空間をもつ接客本位の伝統的和風住宅は、西洋住宅の間取りや椅子式の導入、生活の合理性の追求等洋風化の影響で、和洋折衷型の住宅や暮らし方へと変貌した。西洋住宅の影響による住宅の変遷を通時的に考察すると、①中廊下の導入による室の分離(写真1 西川家別邸、大正11年)、②和洋折衷の住生活(写真2 三井八朗右衛門邸、昭和27年)、③近代的建築材の使用(写真3 左/高橋是清邸、明治35年、右/西川家別邸、大正11年)にまとめられる。ただ複列式平面は踏襲されている。



写真1 中廊下(左)

写真2 和洋折衷の居間



写真3 近代的ガラス戸・タイル張り

(3) 韓国南部地方における伝統韓屋の特徴と変遷

韓国南部地方の伝統住宅は一列型平面（一字型）が基本で、主屋棟（内棟）の室の構成は、左または右から「台所－内房－マル（大庁、板の間）－越房（向いの房）」の順序で配置される。各室は正面2間構成で、全体の規模は、正面4間から7間で、一般的に前後に縁側を設置する（間の分化）。主屋棟、舎廊（サラン）棟、行廊（ヘンラン）棟は分散型配置をする（棟の分化）。住宅は内外法により女性の空間（主屋棟）と男性の空間（舎廊棟）を区別し、厳格な身分制度により、主屋棟と舎廊棟は上の空間、行廊棟は下の空間（下人たちの居所）として序列付けられた。なお各棟はそれぞれマダン（庭）により分離・つながり、空間の連続性を持たせる一方、敷地の高低差から棟の位階性を作り出している。こうした伝統性から近代期は身分制度の解体と大地主の出現で農村の新興富豪を中心に大規模の新しい住宅が建てられた。この時期に建築された新興韓屋は、伝統住宅の形を継承しながらも当時の近代的建築要素を積極的に導入しており、都市とは違った近代韓屋として発展した。平面形式は前後縁無型から前縁または前後縁型になり、主に後縁の奥を拡張した部分二列化平面へと変化する。

(4) 近代期南部地方の新興韓屋における日本住宅の影響

近代期南部地方の新興韓屋の調査分析では平面構成、配置形式、マダン（庭）の構成方式や形態など、生活の変化を受容する空間

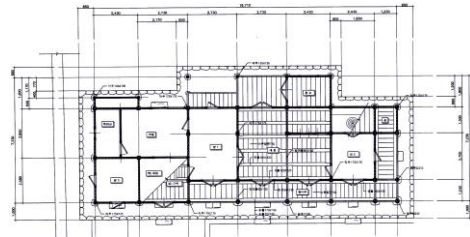
表1 平面と架構形式

平面形式	架構形式
一列型(従来)	2高柱5梁
二列混合型－全間追加型(図面1)	3平柱5梁・無高柱5梁
二列型－縁間拡張型(図面2)	変形1高柱7梁・変形2高柱7梁
二列型－全間追加型(図面3)	変形1高柱7梁・変形2高柱7梁

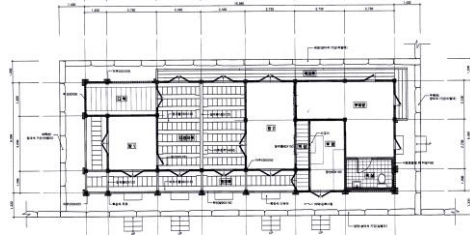
* 出展：図面1 伝統建築記録化調査報告書、文化財庁

図面2 文化財補修調査図面、ユソン建築士事務所

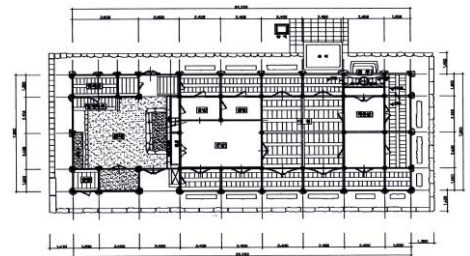
図面3 文化財補修調査図面、サムジン建築士事務所



図面1 羅州洪氏家屋主屋棟平面図



図面2 長興魏氏家屋主屋棟平面図



図面3 羅州朴氏家屋主屋棟平面図

構成要素に注目した。

近代期南部地方には19世紀から南道式二列混合型平面が現れ、20世紀初二列型平面に発展し（複列化現象）、収蔵空間が発達した（表1）。二列式平面は前後全部2間構成の平面をいう。二列混合型は全間追加型のみ存在し（図面1）、二列型は縁間利用拡張型（図面2）と全間追加型（図面3）の2種類である。韓日併合前後を比較すると、伝統的一列型平面は時代と共に減少し、二列混合型平面と二列型平面は持続していた。開放的空間だったマル（大庁）の開口部に窓戸を付けたり、内

部に蔀戸の間仕切りを付けたりしている（写真4 山清権氏古家）。この場合全面は開放的生活空間、奥（後）は収蔵用空間として機能分担される。

棟の分化という従来の配置形式に変化は見られないが、マダン（庭）づくりへの変化が見られた。つまり、伝統的マダンの構成方式は飾らず土のまま広く保ち、マダンの片隅への植栽が一般的であるが、一部の新興韓屋において真中に庭木を植えるなどの近代的庭造りが見られた（写真5右 山清崔氏家屋）。

一方、完全開放型のマル（大庁）の開口部にガラス窓戸の導入も見られ（写真6 山清崔氏家屋）、マルの室内化と建築材の近代化が見られた。これは韓屋のマルが重要な生活空間として居室化される過程といえる。回り縁にガラス戸をはめ、室内化した日本の近代住宅と同じである（写真3）。なお、便所とお風呂を備えた離れに日本式の風呂を導入した事例も見られ（写真7 山清権氏古家）、日本の影響がうかがえた。以上の変化は近代化の波とともに外来文化、特に日本住宅に触発され変貌したといえる。

(5)近代期以降住宅の日韓比較および考察

日本の住まいの近代化は西洋化として捉えることができ、日本の住まいを論ずる上で西洋の影響を無視することはできない。戦後は近代期に成立した中廊下住宅の伝統を継承しながら、アメリカの影響で本格的な西洋化が進んだ。特に西洋住宅の理念である家族中心の住宅として家族団らんとプライバシー空間を追求し、個室化、DKの成立、洋室化が求められた。DK型は公私室分離の住要求とともに都市LDK型住宅へと発展し、現在最も一般的な住宅型として普及・定着した。

室の連結型は、「中廊下型」や「玄関ホール型」より「居間中心型」が最も多く、近代期に成立した「中廊下型」から「居間中心型」への変化といえる。なお、ハウスメーカー別



写真4 二列式マル（蔀戸の間仕切り）



写真5 伝統的マダン（一般） 近代的庭作り



写真6 縁側のガラス戸 写真7 日本式風呂

和室の設置率の平均は5割で、「1階1室型」が全体の8割を占めていた。現代都市住宅において和室は、家族団らん機能とのつながり重視の傍ら接客機能も求められている。近代中廊下住宅における伝統の継承と変容がLDK空間を中心に再編されたといえる。

一方韓国は戦後経済復興期の都市開発、地域再生の中で、住宅の様相が一戸建から集合住宅へと急激に変わり、最も人気の高い住宅形態となっている。間取りは西洋の影響で「居間中心型」が多く、伝統的韓屋の中心であったマル（内）とマダン（半屋外）の役割を併せたような空間機能を果たしている。間取りは洋風であるが、伝統的な温突（オンドル、床暖房）を継承したのが、広く受け入れられた最大要因と考える。

日韓ともに洋風化で、起居様式の立式化と座式併用が混在するなか、日本は木造住宅の継承、韓国においては空間装置としてオンドルの継承が大きな特徴といえる。

(6)まとめ

韓国南部地方における新興韓屋は自発的・自生的近代化の貴重な事例の一つとして、伝

統韓屋の近代化を模索しており、他の近代建築・住宅とは差別される。近代期韓国南部地方の富農層が建てた新興韓屋は近代志向から開港以降の外来文化、特に日本からの近代的文化を積極的に受容し、住宅づくりや住生活に反映した。近代的変化要素をまとめると、大きな変化としては、①平面形式が一行（単列）から二行（複列）に変化し、住空間の室分化、機能分化が行われたこと、一部ではあるが、②従来のマダンからマダン真中での植栽などの庭造りの変化、③ガラスなど近代的建築材の導入、④日本式お風呂の設置などが見られた。南部地方において間取りの二列化は大きな変化であり、田の字型で室がつながり分ける日本住宅の影響と考える。日本の住宅は基本的に田の字型の複列式平面型で、「中廊下」という空間装置を導入し、部屋の分離を図っているが、韓国は真中に位置するマルが中廊下の機能を果たしていたと解釈する。その違いは玄関の有無にあり、玄関を持たない韓国の室内への主なアクセスはマルからの移動である。なお、平面の二列化は住宅規模の拡大につながったといえる。

近代期以降は日韓ともに西洋の影響を受け、「居間中心型」間取りという共通性を持ちながら、日本は木造住宅づくり、韓国はオンドルの伝統を継承する形で変化している。

今後新しい住文化の創造と伝統の継承という課題にどう向き合っていくか、異文化間の衝突と融合・受容を通じた住居様式の持続と変容の実態をさらに解明し、住居の本質と民族・地域差による違いをより深く認識し、比較居住文化論としての展開していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① 森実 未希、金 貞均、親子のつながりから見た住宅間取りの調査研究、四国住教育研究報告集、査読無、第12号、2014. 3、pp. 3-9
- ② Park Chan, Kim Jeong-Gyun, A Study on the Plan Type of the Urban LDK House in

Japan - By the Combination of Plan Composition Elements -, Journal of the Korean Housing Association, 査読有, Vol. 24, No. 1, 2013, pp. 41-49
<http://dx.doi.org/10.6107/JKHA.2013.24.1.041>

- ③ 金 貞均、大西 淳子、日本の住宅平面の変遷に関する考察－西洋住宅の影響の側面から－、四国住教育研究報告集、査読無、第10号、2011、pp. 3-9

〔学会発表〕（計2件）

- ① 金 貞均、都市 LDK 型住宅における和室の展開に関する考察、第60回日本家政学会中国・四国支部研究発表会、2013. 10. 6、香川大学（香川県高松市）
- ② 金 貞均、大西 淳子、西洋住宅の影響からみた日本の住宅平面の変遷について、第59回日本家政学会中国・四国支部研究発表会、2012. 10. 7、岡山県立大学（岡山県総社市）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金 貞均 (KIM, Jeong-Gyun)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：10301318